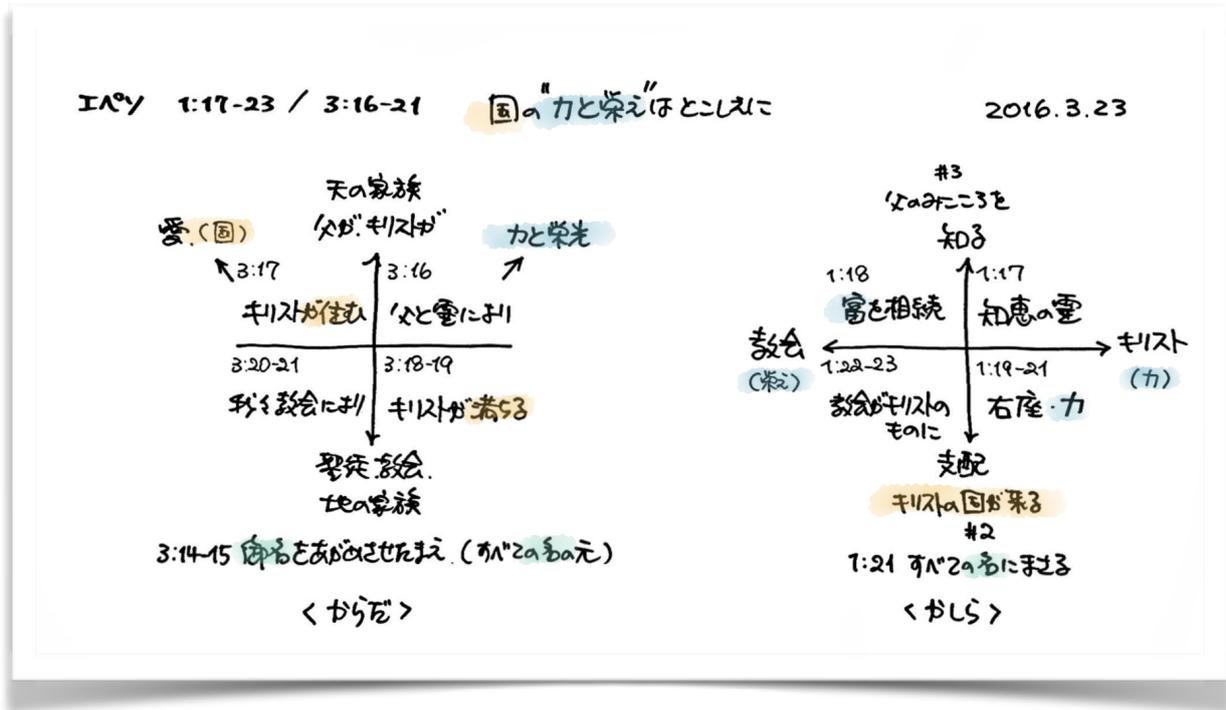




## エペソ人への手紙 1, 3章 エペソ人への手紙の祈り



手紙の中の祈りが、その手紙全体の概略をあらわす位置付け、要約になっているのではないかと予想して、それを確かめています。

エペソの手紙は、最後の6章23節と24節「神からの愛」と「神への愛」ということが全体の概略になっているのでしょうかということですが、その前半の「神からの愛」という段落は、1章17節から23節の祈りと、3章16節から21節の祈り、この2つが、前半の大切な2つの祈りということでもとめられているようです。その17節から23節の分析と、3章16からの分析をしていなかったため、こちらでまとめています。

17節からのところが、どこで切った方がいいのかわかりにくいです。文章もよくわかりませんが、ずっと続いていますね。特に、ababということだと、栄光の父が知恵の霊をくれるということと(1:17)、右の座について力あるご支配をしてくださるという力の話(1:19-21)が(右)半分にあって、(左側半分には)18節のところ聖徒が受け継ぐ栄光がどんなに富んでいるものなのかということと、(1:22-23)キリストに教会が与えられ、教会はキリストの体になりました、ひとつになりましたということですので、キリストと教会、力と栄え。「国と力と栄えとは、とこしえに神様のものです」という主の祈りに、たぶん後で付け加えたものだと思いますけれど、アーメンの長いものというのがあります。

それをよく見ると、3つ「国」「力」「栄え」ではなくて、国が、力と栄えということの2つであらわされているということなのだろうというのが、こういうところからわかります。力と栄えがあらわされているというのが、キリストの国が来ました。キリストの国が来たら、その力、ご支配と繁栄があらわされるということなのでしょうということで、力と富、栄光、みこころを知ることと、国が来るということ、知る(17)、知る(18)という前半。知ること(1:17/1:18)と支配(1:19-21/1:22-23)、国が来ることという

ことで、エペソ全体も、みこころと御国が来るというふうに概略を見ていましたけれども、前半(1:17/1:18)は、御心を知る。後半(1:19-21/1:22-23)は、国が来るということでしょう。

3章も4つに分けました。分けにくいところが、17節後半の「愛に根ざし、愛に基礎を置いている」というのが、17節についているのか、18節の頭なのかというところもわかりにくいみたいですが、この節の通りに分けてみました。

こちらの場合は、16節、20節、21節に力と栄光があります。そして、17節のところに「愛」を入れて、18節、19節のところに愛の共通点があるのですが、17節のほうは、キリストと一緒に住んでくれる。18、19節は、キリストが満ち溢れる、あなたがたが満たされるということです、(3:17/3:18-19)は愛の一致について言っているかなと。こちら(3:16/3:20-21)は力と栄光。こちら(3:16)は、父と霊によって。こちら(3:20-21)は、教会、私たちによって栄光があらわされるということで、違いがありますが、力と栄光。それと国が来る、教会が一つになる、愛の一致というのが(3:17/3:18-19)、神様の国が来るのだということが言えるのではないのでしょうか。

3章を前半と後半で分けると、前半のほう(3:16/17)は、父が、キリストがということですね。後半のほう(3:18-19/3:20-21)は、聖徒、教会によりということです。

出だしのところで、「天上と地上で家族と呼ばれるすべての者の名の元である父の前に祈ります。ひざをかがめて」という導入が14節、15節にありますけれども、こちら(上3:16/17)が天の家族、下(3:18-19/3:20-21)が地の家族ということなのかなということです。

「御名をかがめさせたまえ」すべての者の名の元である父の前に膝をかがめるという「御名をかがめさせたまえ」ということで、御心が天になるごとく(3:16/17)、地にもなさせたまえ(3:18-19/3:20-21)、御国が来て(3:17/3:18-19)、力と栄光があらわされる(3:16/3:20-21)というような概略になっているのではないかと思います。